

男女共同参画推進せんだいフォーラム 2020

先達に聞く 2020

長く活動してきた女性たちが語る、「次世代に伝えたい思い」

2020年11月13日(金)
エル・パーク仙台 スタジオホール

目次

「平和への思い」 奥山 悦子 婦人民主クラブ 宮城県支部協議会 事務局長	P.1
「女性の活躍を願って」 齊藤 ツメ 北京 JAC 仙台世話人、ノルウェーに学ぶ会会員	P.2
「安心・安全の未来のために」 平 和子 仙台石けんをひろめる会 幹事	P.3
「ことばを教えるということ」 田所 希衣子 外国人の子ども・サポートの会 代表	P.4
「誰もが自立できる社会を目指して」 中村 祥子 認定特定非営利活動法人グループゆう 代表理事	P.5
受けとめ、つなぐ思い ～話し手へのメッセージ	P.6

※公益財団法人せんだい男女共同参画財団のホームページで、
この冊子の PDF ファイルをダウンロードできます。

URL <https://www.sendai-l.jp>

「平和への思い」

奥山 悦子 (おくやま・えつこ) さん

婦人民主クラブ 宮城県支部協議会 事務局長

1998年 婦人民主クラブ 入会

2003年 同宮城県支部協議会 事務局長

婦人民主クラブは、戦後いち早く「もう二度と戦争を繰り返してはならない」という女性たちの思いを集めて設立された。その「平和」を求める設立趣旨に賛同し、入会。母親から戦争で苦しめられた生い立ちを繰り返し聞いたことが、自身の「平和」を大切に思う心を育て、活動を支えている。



活動について

婦人民主クラブは太平洋戦争が終わった翌年、1946年3月に設立されています。私は、戦争を体験した女性たちがもう2度と悲惨な戦争を繰り返してはならないと平和を求めて設立したことに、心打たれ入会しました。小さい頃から母に聞かされてきた、戦争の苦しみ。それが私の「平和」を大切に思う心を育て、現在の「活動」を支えています。

母の生い立ち

私の母は1920年生まれで、3人姉弟の1番上です。母の父親は、軍隊で暴力を受けたことが原因で病気になり、母が6歳の時、29歳の若さで亡くなりました。祖母は若かったので、乳飲み子だった母の1番下の弟を連れて実家に戻されることになり、家族は散り散りになりました。母はどんなに悲しく、寂しく、そして悔しかったか、その時の様子を何度も何度も私に話しました。それを聞く私も涙が溢れました。

家は貧乏で、私の母は、伯母の家に預けられました。伯母の家は農家で農機具店もやっていたので、母は朝早く起きて食事の支度、学校から帰ると大きなかごを背負ってお蚕さんの桑の葉摘みと、大人に負けないくらい一生懸命働いたそうです。数年後、祖母が再婚して母の1番下の弟が戻ってきました。弟たちが「親なしっ子」といじめられるのを見るにつけ、母は「親がないということだけで何故いじめられなければならないのか」ととても悔しかったと話していました。

母は、春には摘み草、秋には拾った栗の実を近所のお金持ちの家に持って行ってお小遣いをもらい、お祭りの時などに弟たちに渡していました。親がない弟たちに惨めな思いをさせたくなかったそうです。そんな時いつも「おとつあんがいたらな。兵隊に行かなかったら病気にもならなかったのに…死ななくてもよかったのに…」と思ったそうです。再婚した祖母は産後の肥立ちが悪く、母が16歳の時、36歳で病死しました。

戦争が生んだ苦しみ

太平洋戦争が激しさを増す中、母の1番下の弟は家が貧しかったこともあり、自ら志願をして軍隊に入りました。戦艦武蔵に乗り、1944年10月南方の海で、アメリカ軍に攻撃され撃沈し戦死しました。18歳でした。母は「年端もいかない弟が、親がおらず貧乏なばかりに、かわいそうなことをした。」と悲しんでいました。

戦時中、母は父と結婚しますが、父は出征したボルネオ島でマラリアという病気にかかり、日本に引き揚げ後も治療費で苦勞したそうです。父が戦地に行っている間に、長男である父の兄も戦死したため、母は私を連れて父の実家に入り、慣れない農業や姑の嫁いびりにあい、私を道連れに何度も死のうと思ったそうです。でもその度「これも戦争のせいだ。いつか戦争は必ず終わる。」と自分に言い聞かせて、理不尽さに歯を食いしばりながら頑張って生きてきました。

母の思いを継ぐ

男性が戦争に行っている間、女性たちも、母のように、残された家族を守って戦っていました。母はいつも「戦争さえなかったら、父親も弟も義兄さんもそして母親も死ぬことはなかった。自分もこれほどの苦勞をすることもなかった。」と口癖のように言っていました。そして「今は特高もない。何言っても、何しても、自由でいいな。」と心から安堵したように話していました。

「平和憲法」が制定されて74年、現在、私たちは戦争に行つて死ぬということはありませんが、「平和」を脅かす出来事は次々と作り出されています。その都度、私たちの先輩たちは「平和」を守るために行動してきました。「いつか来た道」を戻らないように。指の間から「幸せ」がこぼれ落ちないように、と。

特に、若い方々には「命の大切さ、平和の大切さ」について関心を持っていただきたいと思います。「平和」を守るために、ご一緒に声を上げ、行動していきましょう。

「女性の活躍を願って」

齊藤 ツメ (さいとう・つめ) さん

北京 JAC 仙台世話人、ノルウェーに学ぶ会会員

- 1998年5月 「北京 JAC 仙台」設立 世話人
- 1998年7月 研修会「男女共同参画基本法の論点整理」で講演会やシンポジウムを開催
以後毎年「バックアップスクール」を開催
- 2020年3月 「北京 JAC 仙台」解散
- 1999年5月 「クリスティンさんを招く会・仙台」発足
(後に「ノルウェーに学ぶ会」に移行)
- 2000年11月 ノルウェー女性事情視察 (オスロ、トロムソ等訪問)
- 2001年1月 視察報告書発行 以後もノルウェーとの関りを受け、報告書等を作成



北京 JAC 仙台の活動について

北京 JAC 仙台は、1995年、北京で行われた第4回世界女性会議の後にできた会です。会議で制定された「北京行動綱領」を実行に移すため、東京に「北京 JAC」という団体が設立され、その後各地に活動が広がって行く中で、仙台にも1998年に「北京 JAC 仙台」が設立されました。「北京行動綱領」というのは、女性の人権に関する最も包括的で高い水準の国際文書であり、12の重大問題（貧困、教育、健康、女性への暴力、武力紛争、経済活動、政治参加、女性の地位向上、人権、メディア、環境、少女）が取り上げられています。北京 JAC 仙台でも、これらの問題解決に向けて政策提言を行う等、活動を開始しました。

最初の活動は、公募制市民企画講座として「男女共同参画社会基本法をみんなのものに」を行い、2001年7月には北京 JAC 全国シンポジウムを仙台で開催しました。また、2002年には「バックアップスクール in 仙台」を開催し、女性の議員を送り出すための連続講座を行いました。

2010年9月には、内閣府特命男女共同参画担当大臣であった岡崎トミ子さん宛に要望書を提出。男女共同参画社会の実現を最重要課題として、その早期達成のため、国際女性差別撤廃委員会の総括、職員のフォローアップを1年以内に実現して欲しいと要望しました。そのほか、介護保険の見直しや、仮設住宅における被災者支援なども北京 JAC 仙台が行ってきた活動です。

ノルウェーからの学び

ノルウェーに学ぶ会ができたきっかけは、1999年ノルウェーのクリスティン・ハルヴォルセン党首が来日され、東京や北九州で講演されたことです。30年足らずの間に女性議員が飛躍的に増えたノルウェーの運動を紹介し、日本の女性たちにアドバイスされました。仙台でも「ノルウェーから学ぼう！」という声が上がリ、37名の有志でクリスティンさんを招くことができました。

た。「ノルウェー政界女性大躍進～女性議員が増えると社会はこう変わる～」というテーマでお話いただき、終了後、「女性大躍進の秘密」という冊子をつくりました。

その後、杜の都の女性会議の海外自主研修に応募し、ノルウェーに行くことができました。2000年11月のことです。8日間、ノルウェーの様々な地を訪れ、地方議員と懇談し、地方議会や大学を訪問することができました。

ノルウェーの実情を学んで、仙台でもより多くの政策決定の場へ女性を増やしたいと思い、当初「クリスティンさんを招く会」だった団体名を「ノルウェーに学ぶ会」に変更し、活動してきました。ノルウェーからいただいた小冊子「Women Can Do It!」を訳して本にし、この10年間で40回ほどの講習を行いました。また、市民からの募金で、ノルウェー国立女性博物館のアート、「スピーチテーブル・グロ」（ノルウェー初の女性首相グロ・ハーレム・ブルントラントを表現した演台）の姉妹作品を、「男女共同参画のシンボル」としてせんだい男女共同参画財団に寄託しました。エル・パーク仙台5階に展示され、講演会などに貸し出されています。ノルウェー訪問はその後も続き、近々小冊子「Women Can Do It!」の改訂版翻訳を発行、コロナ禍でもZoomを使用して会合したり、講習会を開いたりして勉強を続けています。

次世代へのメッセージ

私は、男女間の性差別は、まだ存在していると思っています。「男性は上で女性は下、物事の決定権は男性にある」という態度で女性に接する人はまだまだおられます。でも、この状況に息苦しさを感じている男性もいるのです。マジョリティー男性は、不公平な力の配分に異議を唱え、権限を放棄してこそ、「男性の解放」となるのではないのでしょうか。いつかそんなテーマで男女間の話し合いができれば、面白いだろうなと思っています。

「安心・安全の未来のために」

平 和子 (たいら・かずこ) さん

仙台石けんを広める会 幹事

1976年 仙台石けんをひろめる会 活動開始
1983年 同会 入会

仙台石けんをひろめる会は、合成洗剤の使用を止めて石けん製品に切り替えることを勧め、限りある水資源と環境をきれいにし命を守る活動をしている。また、年々高性能化しているといわれている合成洗剤と柔軟仕上げ剤に添加されている人工香料による香害など、化学物質過敏症の実態についても取り上げ、発信している。



石けんに出会う

私が石けんをひろめる会に入ったのは、合成洗剤がどんどん新しい製品を出してきていた昭和 40 年ころです。当時私は何の疑いもなく毎日の洗濯に合成洗剤を使っていました。私も子どももアレルギー体質で、アトピー性皮膚炎がなかなか治らなかったのを覚えています。

その頃は今のようなスーパーなどはなく、魚屋・八百屋・肉屋など小売店があったのですが、ある時近くの肉屋に行くと、店のおばさんが男性と話しているのが耳に入ってきました。見ていると、おばさんが豚肉や牛肉の脂の塊が入った大きな袋を手渡し、男性の方はブリキ缶（その当時は一斗缶（18ℓ））をおばさんに渡します。その男性は戦前から仙台で石けんを作っている東北石鹸の社長さんでした。当時は天然油脂が少なかったのか、肉屋さんを廻って、石鹸の原料となる油脂と石鹸とを交換して歩いていたようです。当時の東北石鹸は粉石鹸やクレンザーも製造しており、肉屋のおばさんが受け取ったブリキ缶の中身は粉石鹸でした。その粉石鹸を少し分けてもらったことがきっかけで、私は石鹸の良さを知ることになります。それと今では仙台名物といわれている“坊ちゃん石鹸”の前身で、当時は“釜だし一番”という商品名で売られていた固形石鹸が添加物のない純石鹸なので、安心して使っていました。皮膚科の先生も勧めてくれました。

活動を通して学んだこと

洗濯を粉石鹸に切り替えると、回を重ねる毎に繊維の肌触りの違いを実感するようになりました。そして石けんをひろめる会を知り、入会しました。今から 35～6 年前のことです。当時、仙台石けんをひろめる会には大勢の会員がいましたが、会員の中に学校の化学の先生が 2～3 人いて、毎月の定例会で石けんと合成洗剤の原料の違いや製造過程の違い等を詳しく教えてもらいました。

その頃は合成洗剤の泡が河川や海に大量に流れ込み、水の汚染が社会問題になっていました。合成洗剤は、原料である石油や鉱物油に化学的な添加物を加えて汚れを落とす仕組みになっており、それらの物質は水では分解しません。そのまま河川や海に流れ込み、水質汚染が進んでいました。一方、石鹸の原料は動物油（豚・牛）や植物油（ヤシ油・パーム油・米ぬか油）などで出ているので川や海に流れる途中で分解します。昔の人たちは、川で洗濯をしても川の中には小魚が泳ぎ、両岸には水草が繁っていたので、洗濯には安心して石鹸を使っていたのでしょう。今は下水道の処理も進んでいるため、排水が直接川に流されることはありませんが、海の水質はどうなっているのでしょうか。

石けんのいいところ

私たちは小学校の社会学級や公民館、コミュニティセンターなどでの出前講座等に出かけるようになりました。仙台市の区民祭りや他のイベントにも参加して、市民の方々の啓蒙に努めました。

最近人気若手俳優がコマーシャルの中で合成洗剤の高性能化を謳っていますが、合成洗剤の中には蛍光増白剤や柔軟仕上げ剤など、以前より添加物が多く入っているようです。また、合成洗剤や柔軟仕上げ剤に添加されている人工香料により、化学物質過敏症を発症する人もいて新たな社会問題になっています。

今年は新型コロナウイルス感染症の流行で、手洗いやマスク着用が奨励されています。手洗いでもマスクの洗浄でも、石鹸で洗えば泡が菌を洗い流してくれます。合成洗剤や塩素系漂白剤で洗うこともできますが、有害な化学物質を取り込まないようにする為にも、石鹸で洗った方が安全です。合成洗剤も石鹸もちゃんと表示されていますので、品質表示を見て、水や環境にやさしく、私たちの身体にも良い影響を与える石鹸を、未来のためにも選んで欲しいと思います。

「ことばを教えるということ」

田所 希衣子 (たどころ・きいこ) さん

外国人の子ども・サポートの会 代表

1989年 「国際都市仙台を支える市民の会」の日本語ボランティアとして活動開始

2005年 「外国人の子ども・サポートの会」を4人の発起人で発足

外国人家庭の子ども(小学生～高校生)の日本語学習と教科学習の1対1のサポート活動を行っている他、サポーターのための勉強会、研修会も開いている。子どもたちのために自分にできることをしたいというサポーターたちの思いが、16年間の活動を支えてきた。



子どもたちのサポートのきっかけ

人に頼まれて、日本語ボランティア養成講座の空席を埋めるためにその場所に座った時から、今、約30年になります。自分の活動がここまで続くとは思いませんでした。私は当初、お母さんの教室を担当していたのですが、次第にその子どもたちの言語習得の問題が見えてくるようになりました。早く誰かが子どものサポートをやらないと、このまま子どもたちが大きくなってしまおうと思ひ、2005年に私を含む4人で、「外国人の子ども・サポートの会」を始めることにしました。

外国語を覚えるということ

よく言われる「子どもは言葉をすぐ覚えるから大丈夫」というのは、違います。想像してみたいのですが、例えば、小学校2年生の子どもが家族と外国に引っ越します。それまで自分が覚えた日本語に加え、もう一つ、違う言葉が同時に入ってくるわけです。そのまま放っておくと、子どもはすぐに日本語を忘れます。その時に大切なのは、新しい言葉を覚えること以上に「自分の母語をしっかり持つ」ことなのですが、親御さんからすると、異国の中で自分たちの言葉(母語)を教え続けるのは、とても難しい。でも必要なのです。私たちは活動を通して、「子どもは、言葉も学習もすべての学びの途中なのだ」ということを実感し、「教え続けなければいけない」ということもまた、心に刻みました。

家族のような気持ちで

子どもたちは、日本に来た次の週くらいから学校に行きます。周りを見回すと、全て日本語で、黒板も教科書も全部わからない言葉。その中で一人奮闘しなければなりません。私たちは学校の先生でもなければ塾の先生でもありませんから、「子どもたちの家族になったような気持ちでやりましょう」と話しています。子どもたちは、教科書を開いても、まず漢字が読めません。どう読んでいくかというところから始まります。最初は、

教科書の漢字にルビをふってあげたのですが、あまり役に立ちませんでした。大切なのは、子どもが自分で書くこと。例えば、「春」が読めないとき、私が「はる」と読んで「はる」と書きます。子どもはそれを読んで、自分で教科書に「はる」と書きます。そして「はる」と読みます。そういう作業を積み重ねていくことで、子どもの記憶に入っていくのです。効率だけではありません。子どもが実際に聞いて、見て、考えて、書いて、言って、それを通して学んでいきます。私たちは、日常的に親が子どもの宿題を見るような活動をしています。

助け合うところ

そして活動を通して私がもうひとつ気づいたのは、「子どもたちのために何かできることをしたい」と思う人たちがこんなにも多いということ。震災後、一旦子どもたちが減ったのですが、サポートをする人の数は減りませんでした。発足当初は、「どうしたらこの活動が人の役に立つだろうか?」ということを考えていましたが、会員の方々を見ているうちに、「私の役割は、一生懸命自分が先頭に立つより、このたくさんの方たちが活動できる場をしっかりと作ることだ」と気づきました。

今、コロナ禍でなかなか思うようにいきません。「オンラインで」とみんな言いますが、オンラインで勉強ができる状況の家庭は、とても恵まれています。家族に聞き取りをしたら、スマホやPCは一家に一台で親が仕事に使っている家庭が多いという結果でした。それで今は郵送をベースに教科書やプリント教材を使い、ZOOM、LINEなどもあわせて、小学1年から高校3年までの子どもたちと勉強をしています。やっつけて気づいたのは、外国から来た子どもたちだけではなく、日本の子どもたちも同じような状況に置かれている子がたくさんいること。ですから、みなさんの周りでそういう子どもたちがいたら、ぜひ漢字の読み方でも、計算の手伝いでも、いいです。塾に行っていない子どもたちがいます。ぜひ手伝って助けてあげてください。

「誰もが自立できる社会を目指して」

中村 祥子 (なかむら・しょうこ) さん

認定特定非営利活動法人グループゆう 代表理事

1985年から「学校給食のセンター調理を考える会」「生協の食・産直・環境委員会」「(財)MELON」「環境保全米ネットワーク」「杜の伝言板ゆるる」「介護の社会化をすすめる一万人市民委員会」「地域NPO学会」「Lネット(女性と若者の社会参画支援)」等NPO活動を行ってきた。

1995年から、配食サービスを通じて女性の自立と社会参画を目指す「グループゆう」の代表を務める。現在、幼児から高齢者のくらしをサポートする事業を行っている。



グループゆうの始まり

NPO法人グループゆうは、1995年にみやぎ生協の食と環境をテーマに地域で活動していた15人の女性たちによって立ち上げられました。仙台市が家賃の一部を助成するボランティア事業に手をあげて、配食サービスを開始しました。これからの高齢化社会に向けて、自分たちが得意でこだわりのある安全な食事をお届けし、在宅の高齢者の選択肢の幅を増やしたいという思い、そして、働く女性の介護離職を防ぎ、「介護は他人の力を借りてもいい」という風を吹かせたい、という思いがあったからです。また、アンペイドワークの家事労働をペイワークにしたいという思いがあり、週一回のお楽しみ弁当から1日200食ほど昼食や夕食をつくるようになり、労働対価を生み出すことで、ボランティアだけでなくパートタイマーで仕事場を選択したいという方の働き場所にもなっていました。

配食サービスからの発展

地域社会への入口が配食サービスであったため日常生活を見聞きすることが多く、「あったらいいなと思うサービスをつくろう!」を合言葉にいろんなサービスを作ってきました。現在は、発達に心配のある幼児が、親子で通所する児童発達支援センター、学童が放課後に通所する放課後等デイサービス、自閉症スペクトラム症の成人を就労前・就労後も継続して支援する就労サポート、高齢者の訪問介護サービス、それから、いろいろなサービスを使われる方のサービス設計を一緒にさせていただき計画相談、加えて、国の制度特有の「基準」という枠を撤廃した「助け合い」というサービスも行ってきました。

継続できなかつた事業

地域に暮らす多くの世代に利用いただいて、24年かけて受け入れられてきた「食」を通じた地域活動(配食、地域食堂、子ども食堂、サロン活動)を、残念ながら2020

年8月にたたむことになってしまいました。ノーマライゼーションを目指す中で、日常の障害差別をなくす、知り合いの関係をしてくれる出会いの場でしたので、とても残念でなりません。もちろん閉鎖の原因のひとつにコロナ禍の影響というのがありますが、加えて、経営危機を乗り越えるための資金の備蓄が不足していました。今後女性の社会参画には、起業的視点を加味した経営支援が必要になってくると思います。

これから期待すること

これまでの24年を振り返るとき、思考・感性・情報・体験の違いで人々の行動が分かれることを実感します。思考や感性は他者がいかんともしがたいものです。しかし、情報や体験は思考を変えて、感性に変化をもたらす可能性も持っています。グループゆうは、どんなハンディを持っても普通の日常生活を送れることをサポートしていますが、それを妨げる要因に毎日出会っています。その時「あなたがそう考えるなら仕方ない」ではなく、経験や専門的視点で「こんなことも考えられるし、こんな方法もあります」と後押しすること、情報を提供することで、思考や感性に変化が生まれ、行動が変わる人たちに出会ってきました。

一人ひとりの思考と感性の醸成は公教育が入口で、平等な基本的知識を得る場が整備されていますが、暮らしには多種多様な個々の事情が加わってきます。幸い日本は個人の人権を保障する憲法を持つ国ですから、地域の生活圏での住民の自治活動において、一人ひとりの事情に向き合って相互に自立していくことは、生涯に渡り成長を促すと実感しています。グループゆうでは、待たなしの暮らしの困難を集約し、政策立案者につなげる活動も行っていますが、残念ながら政策立案者の議員との連携は課題を残したままです。世界に比べて日本は自分の声を届けるということを自粛気味で、同調圧力も危惧しています。暮らしと政治のかかわりに取り組む中間支援組織として、今後の財団の市民への貢献活動の展開を楽しみに、期待しております。

受けとめ、つなぐ思い ～話し手へのメッセージ

[奥山 悦子さんへ]

- ・奥山さんのお母様から娘へ伝えてくださったのと同じように、私たちにも伝えてくださりありがとうございます。私も子どもに伝えます。
- ・戦争が家族に与えた辛さや苦労は、学校や教科書では伝わらない平和の大切さを伝えてくれました。
- ・平和を大切に思う気持ちを忘れないよう、日々暮らしていきたいと思います。
- ・「指の間から幸せがこぼれ落ちないように」の言葉に、平和は行動と意志なしには守れないと感じました。

[斉藤 ツメさんへ]

- ・市民活動はひとつでも大変なのに、長い間、たくさんの活動をされてきたことに感服しました。
- ・ツメさんのその行動力が素晴らしいと思います。そのエネルギーはどこからくるのか、聞いてみたいです。
- ・Women can do it! 引き継いでいきます!
- ・男女共同参画社会の実現を目指してフットワーク軽く活動を続けてこられたツメさんに心からの拍手をお送りしたいです。

[平 和子さんへ]

- ・新しい課題に次々取り組んでこられたお姿に頭が下がる思いです。生活者だからこそ気付けることがたくさんありますね。
- ・健康、環境を考えることの大切さを学びました。
- ・環境に良いものを使うことは、自分自身のためにも、そして子どもたちのためにも、私たち人間が忘れては

いけないことだと知りました。

- ・なぜ石けんがいいのか、納得すると選択も違ってきますね。これからはちゃんと選んでいきたいと思えます!

[田所 希衣子さんへ]

- ・子どもがいかに弱い立場に置かれ、懸命に生きようとしているか、いつのまにか気づかなくなっていたと思いました。ご活躍を知れてよかったです。
- ・とても素敵な活動だと思います。子どもたちの将来の可能性が開けていくと思いました。
- ・「私の活動は、たくさんの人たちの思いを活かす場をつくること」という言葉、感動しました。
- ・あたたかい田所さんのお人柄がすごく伝わってきました。続けることの大切さを教えていただき、ありがとうございました。

[中村 祥子さんへ]

- ・一人ひとりの“あったら良いな”のサービスを創造し、提供し続けている中村さんは、地域のデザイナーですね! まだまだ一緒に活動していきましょう!
- ・長い間、様々な問題の解決に向けて真摯に取り組んでこられた姿に感動しました。
- ・「情報と経験が思考を変えろ」肝に銘じます!
- ・これからの女性活躍支援には経営の視点が必要というご指摘は、若い世代にとって大きな力になったと思います。自分の声を届けることは自粛したくないです!



男女共同参画推進せんだいフォーラム 2020
「先達に聞く 2020」

2021 年 3 月発行
公益財団法人せんだい男女共同参画財団

仙台市男女共同参画推進センター
エル・パーク仙台
〒980-8555
仙台市青葉区一番町 4-11-1
141 ビル（仙台三越定禅寺通り館）5・6 階
TEL. 022-268-8300
FAX .022-268-8304